

指示があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

I 受験に際しての注意

- 1 問題用紙は一ページ（表紙を除く）から十三ページまでである。
- 2 問題の内容についての質問には、いつさい応じない。それ以外のことがらについて尋ねたことがあれば、手をあげて監督者に聞くこと。
- 3 監督者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐやめること。
- 4 解答用紙が折れ曲がったり、破れたり、汚れたりした場合には、手をあげて監督者に申し出ること。

II 解答記入上の注意

- 1 すべてマーク方式で解答を記入すること。
- 2 マークは必ずHBの黒鉛筆を使用して記入すること。ボールペン、万年筆、サインペン等を用いてはいけない。
- 3 答えは、すべて各問題の指示にしたがって解答欄にマークすること。
- 4 一度マークしたものを訂正するときは、プラスチック消しゴムで完全に消してからマークしなおすこと。消して出たカスはきれいに払っておくこと。
- 5 次の場合は、いずれも誤答となるから特に注意すること。
 - (1) マークの仕方が悪かった場合。（特にマーク欄が塗りつぶされていなかったり、外側に少しでもはみ出した場合）
 - (2) 問題が要求している以上に余分な答えをマークした場合。
 - (3) マークすべきところ以外に印をつけたり、汚したりした場合。特に枠内は絶対に汚さないこと。
 - (4) 訂正の場合の消し方が不十分な場合。

III 氏名等の記入上の注意

- 1 問題用紙と解答用紙の両方の所定欄に、漢字で氏名を、算用数字で受験番号をそれぞれ記入すること。
- 2 解答用紙の左側にある受験番号をマークすること。

氏 名	
-----	--

受験番号					
------	--	--	--	--	--

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の漢字の部首を次より選び、番号をマークしなさい。

- A 慕 ① 小 ② 日 ③ 大 ④ 草
B 墨 ① 日 ② 里 ③ 彡 ④ 土

問二 次の文で、漢字が適切に使われているものを一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 活期的な発明が認められて表彰された。
② 彼の業績は称賛に価する。
③ 金融恐慌の到来を憂える。
④ 意外な展開に彼は動揺の色を隠せなかった。

問三 A・Bそれぞれの□に共通する漢字を次より選び、番号をマークしなさい。

- A 米 □ ・ □ 子 ・ 顆 □
B 起 □ ・ 降 □ ・ □ 線
① 穀 ② 稜 ③ 状 ④ 粒
⑤ 因 ⑥ 伏 ⑦ 光 ⑧ 玄

問四 次の文中の□を補うのに最も適切な四字熟語を一つ選び、番号をマークしなさい。

*我々は□をともにして將軍家の再興に奔走した。

- ① 一触即発 ② 臥薪嘗胆
③ 艱難辛苦 ④ 周章狼狽

問五 次の□に一字を補い四字熟語を完成させ、最も適切なものを選び、番号をマークしなさい。

- A 晴 □ 雨読 ① 天 ② 耕 ③ 海 ④ 快
B □ 材適所 ① 適 ② 逸 ③ 人 ④ 要

問六 次の文中で「水を差す」が適切に用いられているものを一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① せっかくうまくいった話し合いに水を差すようなことを言ってはならない。
② 指導する時には相手が理解しやすいように、表現には特に水を差す必要がある。
③ 停滞気味だった会議が、彼が水を差すことによって再び議論が活発になった。
④ 今期は、商品開発に後れをとって、他社との間に水を差す結果となってしまった。

問七 次の語句の意味として最も適切なものを選び、番号をマークしなさい。

*木で鼻をくくる

- ① 冷淡な態度
② 浅はかな考え
③ 必要のない心配
④ とっさの判断

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

将棋の世界は、ここ二十年ぐらいで大きく変わった。

ルールが変わったというのではない。ルール自体はおよそ四百年間、小さな変更はあっても、根幹をなしている部分は今も同じである。^①将棋のとりえ方が大きく変わってきたのだ。^②

将棋には無限に近い可能性がある。無限に可能性のある将棋は非常に難解で、人間の力ではわかり得ない。だから、昔からの考え方は、「一局の将棋」は、どの道を通ったか、どういう選択をしたかで勝ちに結びつくのではなく、棋士の個性と個性のぶつかり合いで勝負が決すると考えられていた。

そういう漠然とした広い世界に、情報化時代の波が入ってきた。パソコンが導入されて、過去の棋譜を簡単に検索できるようになり、純粹に将棋の技術だけを学べるようになったのだ。その結果、将棋界全体が、棋譜や情報を集めて分析し、研究するという体系的、学術的なアプローチ方法に変わったのである。^③

A、この形になったときにはこちらが「よくなる」「悪くなる」という研究が非常に発達してきた。そういう研究や勉強をしない棋士はいない。毎日毎日、情報を集め、研究し、分析して最新の形に精通することに努力するようになった。

経営者が、毎日「日本経済新聞」を読んで、紙面から「何か役立つことはないだろうか」「新しいヒントになる記事はないだろうか」と限なく調べるのと非常に似ている。長い将棋の歴史の中から見ればほんの短い時間だが、展開が大きく変わったのだ。

本格的に変わり始めたのは十年ぐらい前からだが、内容ががらっと変わってしまったので、それまでの考え方はついていけなくなった。

たとえば、私が十代のころに、よく勉強した形がある。しかし、今の目から見るとすでに古い将棋で、戦術として今の将棋に役立つことはほとんどない。対局でその頃の情報や知識を生かす場面にならない。後輩が見ると「そんな手があったのですか？」と、まるで古典落語に接する感覚なのだ。昔勉強したことが役立たないことに虚しさをおぼえることもある。

それがまったくのムダであったかという点、自分ではムダだったとは思っていない。^④確かに、今の人なら、私が学んだ三年分、五年分の知識も一冊の本を読めば一気に詰め込むことができる。

B、^⑤私自身は、それを理解していく過程で、こうすれば早く修得できる、こうしたほうが理解が深まるという方法論を得ることができた。プロセスの中の思考力とか勝負への対処法などは、将棋を戦う戦術としては何の役にも立たないが、決断力や構想力、将棋についての考え方（大局観）を豊かにする糧にはなっているだろう。そういう知恵は、ぎりぎりの勝負どころで力を発揮する支えになってくれるものだ。

最初に流行ったのは、体系化しやすい将棋だった。みんなが同じデータを基に考えるので、過去のパターンと似た形が研究されて定跡になった。

体系化が進むと、たとえば、一つの戦型を初手から、「こう、こう、こうなって……」と最後の詰めまで研究し尽くしてしまう。

C、知らなければ百パーセントやられてしまう。プロの世界では、これが「よし」という結論が出たら、その形は二度と実戦に現れない。将棋の一局の指し手は平均して百二十手ぐらいだが、さまざまな戦型について、初手から四、五十手は研究され、七十手目、八十手目まで研究され尽くされている戦型もある。たとえば、矢倉戦法は昔は二十四手目の局面で次の一手をどうするか、そこから本場の勝負に踏み込んだが、今は研究が進み、四、五十手先の局面で、次の指し手をどう選択するか、新しい手をどう出すかが問われる。詰めの形も研究され、「これはこちらがよし」という結論を導き出してしまう。

以前の勝負では、すでに知られていることに、自分の思考やアイデアをプラスして戦った。だが体系化の進歩によって、単にその指し手を知らなかった、研究していなかったというだけで勝負がつくようになった。最先端の知識や情報を「知っている」という、その一点だけで決着がついてしまう。相手に負けるのは、自分が知識や情報の収集を怠ったためだと言われても仕方がない。

⑦ 知らなければ、その瞬間で負けである。いわば一瞬で勝負が決まる。そのために、たとえて言うなら、相撲で、立ち合った瞬間にいか

に素早く相手のまわしをとるかというような技術をすごく磨いている。

相撲は二人の力士が仕切り、立ち上がってまわしを取り合うまでおそらく一秒もかかってない。○・○何秒の世界なのだが、その○・○何秒の瞬間に、両まわしを取ってしまう、自分の好きな形に持ち込んでしまう、そういう形に持ち込めれば、相手はいくら力や技があつても、そのあと、力を出す間もなく土俵にたたきつけられてしまう。

将棋の世界でもそれと同じことが起こっている。どんなに読みの力や経験があつても、立ち合いで負けてしまうと、力を発揮する場面にならないで勝負がついてしまう。あつという間に土俵の外にはうり出されてしまうわけである。そのため、大部分の棋士たちは、そういう知識とか情報に重きを置いて研究し、練習しているのが現状だ。

若い人たちはよく研究していて、たとえば、矢倉戦法であつたら「矢倉研究会」と名づけて、八人とか十人の棋士たちが集まり、矢倉の局面だけを深く研究しているのだ。くり返し研究しているから多くの情報や知識を蓄積できる。かなりのアドバンテージが得られるわけだ。

つまり、過去にどれだけ勉強したかではなく、最先端の将棋を、どれだけ勉強したかが重要なのだ。ここ一年とか二年とか、本当に短い間にどれぐらいそれを勉強しているかが問われるようになった。

その土俵は誰も避けては通れない。最先端で争っていると、そこを避けることは、逃げることでもある。勝負を逃げてしまうと、気持ち的にも逃げるようになってしまう。そして、段々と消極的な作戦しか選べなくなってしまうのだ。

問一

① 将棋のとらえ方が大きく変わってきたのだとあるが、どのように変わったのか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① ルールにしばられず、自由に将棋を打つようになった。
- ② 将棋の勝負において個性と個性の戦いを重視するようになった。
- ③ 情報化時代に合わせて将棋の勝負をパソコンでするようになった。
- ④ 将棋に関する多くの情報を取り入れてそれを分析、研究するようになった。

問二

A C に当てはまる最も適切なものを次より選び、それぞれ番号をマークしなさい。

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| <p>A</p> <p>① つまり</p> <p>③ なぜなら</p> | <p>C</p> <p>② さらに</p> <p>④ たとえば</p> |
| <p>B</p> <p>① だが</p> <p>③ ゆえに</p> | <p>② したがって</p> <p>④ あるいは</p> |
| <p>C</p> <p>① されど</p> <p>③ なぜなら</p> | <p>② だから</p> <p>④ やがて</p> |

問三

② 無限に可能性のある将棋とはどのようなことか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 将棋は攻め方のパターン、勝ち方などたくさんあるので、これだと限定はできないこと。
- ② 将棋には長い歴史と伝統があり、そこからは多くの学ぶべきことがあるということ。
- ③ 将棋を学ぶことにより、数多くの知識を得ることができること。
- ④ 将棋は研究すればするほど力が伸び自分自身を無限に伸ばしてくれること。

問四

④ まるでの品詞名を次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 形容動詞
- ② 助動詞
- ③ 接続詞
- ④ 副詞

問五 ⁵ムダだったとは思っていないの理由として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 自分が知識として修得したものは将棋以外の生活で生かされているから。
- ② 自分が学んだことが将棋の勝負においてのきわどいところで発揮できるから。
- ③ 自分が修得したものは将棋では役に立たないが決断力、構想力を磨くうえで良かったから。
- ④ 自分が十代で勉強したものが試合で生き、後輩からも驚きの目で見られるから。

問六 ⁷知らなければ、その瞬間で負けである。いわば一瞬で勝負が決まるとあるが、ここで勝負に必要なものは何か、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 相手を読む力
- ② 自分の思考
- ③ 最先端の知識
- ④ アイデア

問七 ⁸力や技とあるが、将棋に当てはめると何になるか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① たくさんさんの経験
- ② パソコン技術
- ③ 最先端の情報
- ④ 最先端の攻め方

問八 文中と合致する最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 将棋のとらえ方が大きく変わり、昔学んだものは必要としなくなった。
- ② 長い将棋の歴史の中で個性を重視する戦い方が最も大切なものである。
- ③ 立ち合いで負けたとしても気持ちの持ち方で力を発揮することができる。
- ④ 最先端の将棋を避けると勝負から逃げることになってしまふ。

問九 ⁶アプローチ プロセスの意味を次より選び、それぞれ番号をマークしなさい。

- ① 物事に挑戦すること。
- ② 対象に接近すること。
- ③ 学問を研究すること。
- ④ 事物を深く見つめること。

- プロセス ⁶
- ① 経験
 - ② 過程
 - ③ 知恵
 - ④ 研究

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくはひとつの決意をしていた。

最後まで聴く。それだけのことだ。

が、楽じゃない。

耐えるぼくを誘惑するように、ナスは五曲目、智明は七曲目の途中で心地良さそうな寝息を立てはじめる。

ぼくは親指のつめを太ももにつきたててがんばった。友達に聞いたこわい話を思いだしたり、テーブルクロスの染みを数えたり、あらゆる手を尽くして踏んばった。

努力はむくわれて、いつしか十二曲目の〈子供は眠る〉にさしかかっていた。

淡いメロディー。陰鬱^{いんうつ}な短調。すすり泣くようなピアノシモ。やがてその声もかすれて消えていく。

ぼくはいつも途中で挫折^{さつせつ}していたけど、じつくり聴いてみると、これはなかなか物悲しい曲なのだった。

そして始まる最終曲、〈詩人のお話〉。これがまた^① をかけたような物悲しさだ。無口な詩人が必死で何かを語りかけている。ときどき言葉をなくして立ちつくす。しまいはあきらめて去っていく。

小曲集が完結しても、ぼくはしばらく詩人の行方に思いを馳^はせていた。

そう。ついにぼくは最後まで聴きとおしたんだ！

恐ろしいことに、そのLPにはべつの作品も収録されていたけど、章くんはそこでプレーヤーの針をおろした。

「^② やったな、ついに」

ふりかえるなり、からかうような笑みをぼくにむける。

「うん」

ぼくはにっこりとうなずいた。それから、このときのために用意していた言葉を、勇気をふりしぼって口にした。

「でもぼく、ぼくの好きなロックやポップスだったら、あと三十分は聴いてられると思うよ」

ガキ呼ばわりされた仕返しじゃない。今さらそんなことはどうだっていい。ただぼくは、最後の最後ぐらい、ごまかしじゃないぼくの気持ち、本当のところを、きちんと伝えておきたかったんだ。

章くんはふいをつかれたようにだまりこんだ。^③ ステレオの下^④の収納棚に腰をひっかけて、きよときよとした顔で何度も前髪をかきあげている。^⑤ なかなか怒りだす気配がないから、ぼくまできよときよとしていると、やがて章くんは大きく息を吐きだして、^⑥

「浦和のババアがさ……」

いきなり、とんちんかん話を始めた。

「あのババア、昔、よくうちに遊びに来てたんだよ。まだボケてなかったころな。どうもあいつ、おれのこと哀れんでたみたいでさ、
X だとか言って、何かとうちに来てたんだ」

X
「？」

「ほら、おまえんちにはアネキがいんだろ。智明にも妹がいる。ナスにはじゃがまるがいるし、じゃがまるにはナスがいる。でもおれだけひとりっ子だから、さびしがつてんじゃないかって、さ。まさにあれだ、老婆心^⑦つてやつだな。で、ババアのやつ、浦和から鎌倉のおれんちに来るだけでも一苦勞なのに、いつもこんなばかでかい紙袋まで持ってくんだよ」

こおんな、といって、章くんは浮き輪のように両腕をまるくした。

「何が入ってると思う？」

「ケーキ？」

「ちがう」

「アイス？」

「溶けるって」

「おもちゃ？」

「そうだな、ババアにとっちゃ、これがおもちゃみたいなもんだったんだろうな」

つぶやくなり、章くんは頭^{こぶし}をたれて両足のあいだをのぞきこんだ。添え木でもつけたくなるほど細っこい章くんの両足。その合間からは奥にあるLPの収納棚が透けて見える。

「これだよ、これ」

「あ」

「ガキのおれにはちつともありがたくないレコードをさ、あのババア、紙袋いっぱいにつめてきやがるんだ。しかもその曲つてのがまた堅苦しい……」

「クラシックのピアノ曲？」

ようやく話が見えてきた。

ぼくの声に章くんは苦笑して、

「ピアノの音色は人の心の足りないところを埋めてくれる。それがババアの特論だったんだ。それで、うちにくるたびに毎晩、おれにピアノのレコード聴かせるわけ。埋めろ、埋めろって感じにさ。⁸おれもまだガキだったから、だんだんその気になって、まともに聴いてるうちにさ、そのうちピアノにとりつかれちまって……。なんかこう、なくてはならなくなったわけだ。あのババアだって、今じゃボケておれの顔もわからなくなって、それでもピアノ聴いてるときだけは妙に幸せそうだぜ」

章くんが言って、「でも」とつけたした。

「でもおまえらには、べつにピアノなんていらなかったのかもしれないな」

今度はほくがだまりこむ番だった。⁹

知らなかった。章くんのクラシック好きにそんなわけがあったなんて、ぜんぜん知らなかった。

知らなかったのはそれだけじゃない。さらにこのあと、章くんはまたひとつ、ほくがまったく知らずにいた姿を見せつけてくれたんだ。「もう寝ろ。明日は早いぞ」

章くんが伸びをして立ちあがると、それを合図のようにして、半開きの扉のむこうでうろついていた人影が忍びよってきた。小野寺さんだ。

「すみません、遅くなっちゃって」

章くんの声に小さくうなずくと、小野寺さんはしょぼついた目をソファへむけ、よだれをたらして眠りこけているじゃがまるのもとへと足を進めた。その両腕がじゃがまるを抱きあげると、今度は章くんがナスに手を伸ばした。

え？ とほくが思ったつぎの瞬間には、ナスはすでに章くんの腕の中にいた。

章くんはあの細い腕でナスを持ちあげたんだ。「よいしょ」と気合いを入れて、かなりしんどそうに。

小野寺さんと章くんがよたよたリビングをあとにしても、ほくはまだソファの上で身動きもできずにいた。

当然といえば、当然だった。ほくらが寝入ったあと、章くんも小野寺さんと一緒にほくらを部屋まで運んでいる、と考えるのは自然なことだ。でもほくはそんなこと考えなかった。五年間、一度だって、考えてみなかった。

¹⁰フロアランプの橙色だいだいいろがぐにやりとよじれた。

毎晩毎晩、「よいしょ」と、ほくらを抱きあげる章くんの姿を想像したら、不覚にもほくは泣きたくなった。

そんなにまでしてほくらにシューマンを聴かせたかったなら、聴いてやりやあよかったんだ。何回でも、何時間でも、聴いてやりやあよかったんだ。そして一言でも、なんでそんなにピアノが好きなのか、訊きいてみるんだった。もっと早く、いろんなことを、話してみるんだった。

章くんと小野寺さんがもどってきたとき、ぼくは頭をひざにくつつけるようにしてうなだれていた。^⑪

そんなぼくを横目に、章くんは智明の頭へ、小野寺さんは足下へまわりこみ、ふたりがかりで運びだそうとする。ぼくはようやく顔をあげ、小野寺さんに「代わります」と告げた。

身長のある智明はずっしりと重かった。足下をふらつかせながら階段をのぼり、部屋のベッドにその体を放りだす。じゃあな、と踵^{きびす}を返す章くんを、ぼくはとっさに呼びとめていた。

「章くん！」

「あ？」

「今年の夏は……」

ぼくはあえぐように言った。

「今年のぼくは、卑怯^{ひきよう}だったよ」

章くんは一瞬きよんとして、それからふふんと鼻で笑った。

「おれなんか、昔から卑怯だよ」

ひらひらと、てのひらを泳がせながら去っていく。

章くんの足音が消えてなくなると、暗がりの部屋の中でぼくはとほうにくれた。扉に背中を押しつけたまま、ぼんやり視線をさまよわせる。

ベッドの脇に智明のタオルが落ちていた。何度も何度も洗濯機にもまれ、すっかり色あせたブルーのタオル。ぼくはふらふらと吸いよ

息がつまるような潮のにおいに、鼻の奥がつんとしびれた。

最後の夏のおいだった。

（森絵都「子供は眠る」）

問一

① [] をかけたようなを「程度をさらに超える」という意味となるよう、[] に入れるのに最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 手 ② 輪 ③ 円 ④ 目

問二

② やったな、ついにとという言葉に込められた「章くん」の心情として、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 冷やかし ② 見直す ③ 歓喜 ④ 信頼

問三

③ ⑨ だまりこんだ ⑨ だまりこむとあるが、共通する理由を説明したものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 何の前触れもなく突然本心を打ち明けられ、戸惑う気持ちが強くなったから。
② 予想外の反応をされ驚くとともに、どのような答えを返すべきか迷ったから。
③ お互いの発言に言いようのない悲しみを感じ、泣き出すのをこらえたから。
④ 最後の夜に本音をぶつけることができたことへの満足感があったから。

問四

④ きよときよとした顔に表れている表現技法として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 対句 ② 擬人法 ③ 倒置法 ④ 擬態語

問五

⑤ なかなか怒りだす気配がないとあるが、なぜ「ぼく」は「章くん」に対して怒られそうなことを言ったのか、その理由として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① クラシックの良さを否定するつもりはないが、音楽を聴くことを強制する章くんに制裁を与えたかったから。
② 最後まで眠らずに曲を聴くということをやり遂げたことで、ひと言章くんに見えようと思ったから。
③ 章くんとクラシックを聴く最後の夜には、嘘偽りのない本当の気持ちを伝えたかったから。
④ 音楽を愛する者同士、ジャンルを超えたものを認め合うことによって、音楽鑑賞の幅を広げたかったから。

問六

⑥ 大きく息を吐き出してとはどのような様子を表したのか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 決意を固めた様子 ② 心配事がある様子
③ 安心しきった様子 ④ 不安定な様子

問七

X に入れるのに最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 不憫 ふびん
- ② 不穩 ふおん
- ③ 不朽 ふきう
- ④ 不粹 ふすい

問八

老婆心⁷の意味として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① むさぼり欲しがる心
- ② 慈悲深い心
- ③ 不必要なまでに世話を焼くこと
- ④ 親代わりとなって尽くすこと

問九

埋めろ⁸、埋めろって感じにさとは何を埋めさせようとしていたのか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 教養を身につけたいという欲求
- ② 両親が忙しいことへの不満
- ③ 兄弟がいないことへの寂しさ
- ④ 友人たちに差をつけたい自己顕示欲

問十

フロアランプの橙色がぐにやりとよじれたは「ぼく」のどのような状態を示したもののか、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。¹⁰

- ① 頭を殴られたようなショックを受けている
- ② 五年前の夏を思い出している
- ③ 小野寺さんに同情している
- ④ 涙が出てきている

問十一

頭をひざにくつつけるようにしてうなだれていたときの「ぼく」の気持ちを表すものとして、最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。¹¹

- ① 後悔
- ② 懺悔
- ③ 歆心
- ④ 驚愕

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

つごもりの夜はいたう暗きに、^①松^②どもともして、夜中過ぐるまで、人の門叩き、走り歩きて、何事にかあらむ、ことぐしくの、しりて、足を空に惑ふが、あか月よりさすが音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ほそけれ。なき人の来る夜とて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、^④東^⑤の方には猶^{なほ}することにてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明け行く空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引き替えめづらしき心ちぞ^⑥にうれしげなるこそ、又あはれなれ。

X

。大路のさま、^⑤松^⑥立てわたし花やか

〔徒然草〕

問一 つごもりの意味として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 大晦日 ② 元旦 ③ 夏至 ④ 節分

問二 松^②松^⑤が示すものとして最も適切なものをそれぞれ次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 松の実 ② 門松 ③ 松林 ④ たいまつ
⑤ 待ち人 ⑥ のろし

問三 ことくしくの、しりての現代語訳として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① ものものしく大声で騒いで
② ものすごい勢いで罵倒して
③ 非常に穏やかな様子で
④ ひととき慌てふためいて

問四 東^④が示すものとして最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 関東 ② 東北 ③ 東海 ④ 道東

問五 問五 Xに入れるのに最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① する ② す ③ しない ④ せよ

問六 又^⑥あはれなれである理由として最も適切なものを次より選び、番号をマークしなさい。

- ① 年が明けると、町の様子に目新しさを感じるから
② 年の瀬は何かと一年を振り返ることが多いから
③ 季節の変わり目に親しい人が亡くなってしまったから
④ 明け方の空の様子に過ぎ行く月日を感じるから